

砂の町

ジャーナリスト 横田 弘幸

「市川は砂の上にできた町なんですよ、横田さん」

取材で訪ねた先生は地図上の千葉県市川市あたりを指さしながら説明を始めた。

東京湾の沿岸流に乗って運ばれた砂が、次第にたまって東西に伸びる砂州となり、それが発達して人の住めるまでの土地となった。

砂州の北側には海が残り残されたが、それも次第に埋まり、一帯に市川の町が形成された――。

頷きながら先生の言葉を聞く。

確かにこの町では、靴のつま先で地面をこすれば、貝殻の破片が砂地の中に顔を出す。その砂地の町に独特の風情を醸し出したのが黒松だった。

大正六年十月、東京湾を猛烈な台風が襲う。記録的な低気圧により吸い上げられた高潮が沿岸部を飲み込んだ。都内の商工業者が黒松林の中に豪壮な住宅や別荘を建てたのはその後だった。さらに同十二年の関東大震災後には被災者らが移り住み、一気に住宅地へと変貌し、黒松はまばらになった。

先生は紅茶をすすり、一息つく。ふっと作家、井上ひさしの言葉を思い出した。

井上は昭和五十五年一月、「わが町 市川」と題した文章を東京新聞に発表している。

それによれば、江戸時代、市川の黒松が、江戸川、隅田川の西側に広がる「江戸八百八町の門松のすべて」をまかந்தのだという。市川の果樹や畑も江戸での消費のために作られたものだった。

「江戸あつての市川」であり、江戸と市川は

「主従関係」にあった、と井上は書いていた。

「江戸とのこの主従関係は、いまだに生きている。買い物するのも、映画をみるのも、オーケストラをきくのもみな東京で」ということになる。「働き手はこぞって東京へ出かけて行き、地元で『混ざる』こともない」。

昭和四十二年から二十年間、その“混ざらない”町に井上は暮らし、私も四十年以上を過ごしている。先生はさらに古くからの市民だ。

まるで安部公房の小説『砂の女』ではないか。砂丘の中に残り残されたようにうずくまる小さな町。逃げようと砂を掘れば掘るほど砂にはまり込む。降り積もる砂をかき出しながら暮らすうち、家は蟻地獄のような砂にはまり込み、各々別々の砂の底で暮らす。

砂州の上にできた住宅密集地で、混ざることもない住民たち。人のにぎわいも楽しみも文化もそこに育つのだろうか、と井上は嘆いていた。今、駅前が高層マンションが建ち並び、町は姿を変えた。しかし、砂州に沿って敷設された鉄道や国道を見れば、朝、東京に吸い寄せられる人の流れが夕闇とともに環流する。巨大都市に寄り添って生きる砂の町の、人々の営み方に変わりはない。

嘆きの言葉は、眼前の先生の口からも漏れる。

「これじゃあねえ」

「聞いている、横田さん」

この町で眠るときには枕に耳を押し当てる。海辺のさざ波、運ばれる砂の音。遠い昔の海潮音に聞き耳を立てるうち、眠りに落ちる。